

として價值的のものなり。

以上原始佛教の三藏に就て余の近時の所懐を述べしも若し専門的に原始聖典に就きて究めんには原始佛教其れ自身の獨立的研究も勿論必要なれども原始聖典が大小に廻轉せしものなれば翻て發展佛教より顧みるも可なり。されど少くも佛陀を中心としての研究ならざるべからず。 [了]

(延嶺學窓にて脱稿)

吾祖の時機適化せる五戒の提唱

中 澤 葉 爾 津

問者あつて吾宗の實踐門の窮極は如何と問はく、答者必ず唱題受持一行によつて我身卽是佛となるにありと答ふるであらう。しかして更に唱へらるゝ題目の性質を鑑みるに、題目は妙法五字の單字の名號にすぎずと見ゆれど、實にその性質に於ては、宇宙の根本原理にして、森羅萬象圓融備足して、缺くる所なきものなれば、又宇宙の根本的生命と名くべきものである。(吾宗に於ては、この宇宙の根本的生命を釋尊の永遠的生命に於て見る。今は詳説をはぶく)かくの如く甚遠なる題目なれば一唱の中に佛

教のあらゆる教、戒の圓備せる事は今更言を俟たざる所である。又題目は萬戒中の總戒なれば根本大乘戒である。かく觀察するとき吾等が小乘戒と貶せし戒も今大乘戒とも名くべき唱題も受持一行の當處より、ふりかへつて見るとき根幹たる唱題大乘戒の一分枝とも見る事が出来る。然るに今私はその一分枝にすぎざる五戒を提唱せんとするのである。何故なれば現代唱題の行人の相を見るに。吾祖の所謂口に讀めども心は讀まず、心に讀めども身に讀まざる所の程度ではない。正に唱題を持つて商賣化し營業化した唱題者を見る。かくの如き唱題者の出現せる現今に於ては、むしろ劣なりとする五戒をして、修行をせしめるといふ事は眞の唱題者を作る所以であらうと思ふ。なぜならば若しこの五戒をすら實行し得ないものは到底眞の唱題行人になり得ないからである。されど小乗のまゝの五戒では現代人には不適應である。こゝに於てか吾祖の五戒の説明は鑑機應時宜しきを得たものである。されば吾祖の五戒の説明とは

五戒と申は一には慈悲を起して物の命を殺さざる戒を不殺生戒と名く。道理なき殺生を制するなり。一を殺して萬を生べきをば許すべし。二には盜みせざる戒を不偷盜戒と名く。道理なき盜の事也。三には他人の妻を犯さざる戒を不邪婬戒と名く。四には妄語せざる戒を不妄語戒と名く。由なき事に妄語せざれと也。五には酒を飲ざる戒。僻事を制する也。藥酒をば飲べし。(戒法門縮遺一六)

以上が吾祖の五戒の説明である。中でも一殺生戒の一を殺して萬を生べきをば許すべし。二不邪姪戒の他人の妻を犯さざるを、又五飲酒戒の藥酒は飲むべし等は實に味解すべき聖訓であらうと思ふ。今この文の奥底を察するに、若し聖祖をして現在せしめば、かくありなむと想像する事が出来る。一の所謂萬生の爲には一をば犠牲にしても主義のためには貫徹されたであらう。二の他人の妻を犯さざれと殊更に他人と言はれた邊より文底を推察するに、聖人は妻帯を赦るされてゐる事が瞭然として來る。五の藥酒はのむべし。この御言葉によつて聖祖延山九ヶ年の御生活に御酒を召し上つた事も自ずと領解されるであらう。誠に東西その地を異にすれども基督教のルーテルその人を誰の胸裏にも思ひ浮べるであらう。かくの如く時機適應化する五戒を懇切に御説明になられた唯一の目的は何であるかといふに、切に吾々末徒に實踐を促がさんが爲である。尙吾祖が五戒を主唱せられし事は大小乗の根本戒にして、五戒が完全に實踐し得れば、一切經論にのぶる五戒・八戒・十戒・十重禁戒・四十八輕戒・二百五十戒・五百戒・乃至八萬四千戒も自ずと行われるからである。尙我祖は

五戒破れば此國土次第に衰へ（縮遺四）

このべてゐる。實に吾家に於ける理想たる王佛冥合して本門戒壇建立も、五戒の實踐によつて歸決せらる。故に國家衰亡して戒壇は建立されない。先ず國家を祈りて宗を立つべし。實に國家が安定して、

始めて宗を立て、宗が確立して始めて本門の戒檀も建立されるであらう。實に一天四海皆歸妙法末法萬年廣宜流布も五戒の實踐によつて始めて成立するであらう。今年宗祖入滅六百五十遠忌にあつてこの時機適應化する五戒を提唱してやまない次第である。

感想 思親の涙

遠 藤 養 宗

日蓮聖人の御生活を想像し來るとき、聖人程一生涯を通じて、父母に愛慕の情を捧げられし者は他にあるまい。「大孝は終身父母を慕ふ。」と、古の賢者孟子の言、今聖人の身上に於て、其の實を見る事が出来る。

懷へば身延入山後一ヶ年、文永十二年の二月十六日、即ち五十四回の御誕生日を迎へられし日であつた。懷かしの房州より海苔か届けられた。包を披く間おそしと、取り出して見れば、幼き時に見な